幼児の教育

昭和九年十二月

霜柱

幼稚園の庭に初めての霜が來た朝である。ぽか〳〵と暖い日光を浴びながら保育室の入口に立つてゐると、二人の子どもが馳けて來て、いゝものを見せてあげようと言つて手を差し出した。可愛いゝ兩手を重れて大切そうに何か持つてゐるのである。何んでせうと私が聞くと、容易には見せられないといつた顏付きを見かはして、二人いつしよに手を開いた。一人の手には溶けかけの霜柱が、それでもまだ氷の形をして白く殘つてゐる。次の子の手には、泥にゐれた赤い掌の中で、霜柱がもうすつかり溶けて仕舞つてゐる。

心なの霜柱よ。なぜ、どの子にも握られてゐて呉れないのか。

先生

藤の柄を一握りもつて、女の子が二人私の室へ來た。これで編んで呉れといふのである。私は閉口したが卒直に出來ないと答へた。そして、先生にしてお貰ひなさい。先生はお上手ですよと言ひ添へた。「倉橋先生も先生じやないの？」生眞面目な顏である。そして、「れえ……」と長く引いて二人が顏を見あはせてゐるではないか。

先生に二種あり。滿足を與へ得る先生と與へ得ない先生と」。此の場合、まさかそんなこともいへない。先生のところへ馳けてゆくその子ども達を、入口のところまで丁寧に送り出したのが、その時のせめてもの私であつた。

（倉橋惣三）